

3年B組の課外授業

●しあわせってなんですか●

浜野卓也・作 若林三江子・絵



創作こども文学 6

3年B組の課外授業 ●しあわせってなんですか●

1985年11月 第1刷

作家・浜野卓也
画家・若林三江子

発行者・田中治夫
発行所・株式会社 ポブラ社
〒160 東京都新宿区須賀町5
振替・東京4-149271
印刷・瞬報社写真印刷株式会社
製本・石毛製本株式会社

NDC913/206 p 22cm

Printed in Japan 落丁本、乱丁本はいつでもおとりかえいたします。

©浜野卓也 若林三江子 1985 ISBN4-591-02135-1

3年B組の課外授業

●しあわせってなんですか●

浜野卓也・作 若林三江子・絵



3年B組の課外授業 ●しあわせてなんですか●

もくじ

黄色と黒のんだらバイク 6

受験生たち 17

香代^{かよ}の家 29

一郎^{いちろう}の家 46

決着^{けつちやく}はタイムマンで 60

姫^{ひめ}が池公園^{いけこうえん}に集まれ 73

女番長^{おんなばんちやう}といわれても 95

さぶちゃんの死 111

教師にも成績表が 130

ゴリラが追いかける 147

香代の告白 158

おれたちの夢 173

ある家出 187

解説 砂田 弘 202



作家・浜野卓也（はまのたくや）

1926年、静岡県に生まれる。早稲田大学卒業。
創作、評論に幅広く活躍している。作品に、
「堀のある村」「やまんばおゆき」（サンケイ
出版文化賞）「とねと鬼丸」（小学館文学賞）。評
論に、「新美南吉の世界」「いはれなき哀しみ
の詩——立原道造」がある。
現在、日本児童文学者協会、日本児童文芸家
協会会員

画家・若林三江子（わかばやし みえこ）

1961年、新潟に生まれる。武蔵野美術大学デ
ザイン科卒業。
雑誌のイラストなどのほか作品に「愛の妖精」
「きみの心をささえる言葉」、今後の活躍が
期待される。

3年B組の課外授業

●しあわせってなんですか●

浜野卓也・作 若林三江子・絵



黄色と黒のんだらバイク



1

西一郎は、有坂香代との約束をわすれたわけではなかった。

約束の時間はきょうの四時。永福寺の山門、大木信一と三人がそこで出あって「栄光塾」へいく、ということになっている。

やっぱり約束なんてしなければよかった。あのふたりとならんで町をいくがらじゃない。香代のやつ、なんでおれなんかを、さそったんだろう……。

ならんでいる商店街をのぞきこみながら、一郎は歩いた。そのうちに、時計屋を見つけた。三時四十分である。

ここは、東京の西部にあるH市。

駅もあるこのあたりは桜田南一番街といって街の中心地で、通行人がおおい。

とりわけ若いひとがおおいのは、あわせて五つもの大学、短大があるからだろう。

この街を歩きまわるのはきょううで三日目である。

(きょううもだめだったか)

あきらめて、香代かよと信一しんいちの待つ永福寺えいふくじへいそごうとしたとき、はっと一郎いちろうは息をのんだ。

「やつだ！」

一郎の目が光った。

一郎は、電柱のかげにかくれ、やつをやりすごしておいて、その背後はいてからしのびよった。

「おい！」

「……」

ふりかえったやつやつの顔から、さっと血ちの気がひいた。

一郎は、すばやくあたりに視線しせんを走らせた。あの日、相手は三人だったが、どうやらきょううは、やつひとりらしい。

「お、おれ持っていないぜ」

やつは、ポケットをおさえるようにしていった。一郎が、金を返せ、とせまることはとうぜんのことだった。

「いいから、こっちへこいよ」

一郎は、やつを横こうの小路こうじのおくへ連れていった。

小路をもう一つまがると、繁華街はんかがいのその一角に、まるでうそのような小さな池と、小さなやぶ

と、そして小さなお堂どうがあった。

「あれは修しゅう学がく旅行りょこう費ひだ。返かへしてもらおう」

「うそじゃない、おれは持もってないんだ」

ことばがおわったときには、一郎いちろうのアップいっパーが、やつのあごに決きまった。

「ま、まてよ」

やつは、ポケットから三枚まいの千円札せんえんをとりだした。

「うそじゃない、調しらべてみてくれよ」

やつは、あきらめたように両手りょうてをさしあげた。

一郎の表情へいしやうが、きゆうにさめた。やつやつのいうことはほんとうだろう。

おそらく、一郎からまきあげた二万五千円ばんごうは番長ばんちやうの鬼塚おにつかがほとんどまきあげて、のこりを三人さんにんの子分こぶんどもにわけたのであろう。金をうばわれたあの日のみじめな自分を思いだすと、こんなチンピラてんぴらの手下てしたをおどしてもしかたがない、と思った。

「おまえ、名前ななんていうんだ」

「平井ひらいだ」

「とにかく、これはもらっておくぜ」

平井は、足あしばやに街路がいろに去さっていった。

たった三枚の千円札を、びん！ と指さしではじいてポケットへおさめた一郎が顔をあげると、繁はな

華街のビルの一角の屋上の「栄光塾」の広告が目にはいった。

しまった、おくれちゃったなと、舌うちした。しかし考えてみれば、自分があのふたりといっしょに塾へかようなんで、やっぱりさまにならないと思ったりした。

2

永福寺の参道の桜の花は、ほとんど散っていた。

大木信一と有坂香代は、いいあわせたように、ときおり、境内のまえの坂道のかなたを見やつた。

信一がめがねをはずして、ハンカチでレンズをふいた。

「よっぽど、気になるのね」

香代がちょっと白い歯をみせてわらった。

「ね、きみ、西は、ほんとうにいくといったのかい」

「だから、ここで待ちあわせたんじゃない」

信一は、信じられないというように首をかしげ、数学の参考書を、ペラペラとめくった。

「西くん、約束はまもるひとよ」

香代は、きっぱりといったが、内心は不安であった。

（以前の西くんは、たしかにそうだった。でも、このごろの西くんは、ちょっとおかしい。悪い

仲間なかまともつきあっているみたいだし」

香代かよもいらだつままに、これも意味もなく、数学すうがくの参考書さんこうしょをひらいてみた。
また風が吹いた。

その風を、桜さくらの花びらといっしょに、香代はてのひらでうけとめた。

「あ、つめたい、雨……？」

香代は手をひっこめて空を見あげた。

「雨だよ、いこう。もう十五分もすぎている」

「わたし、かさ持ってこなかったわ」

大木信一おおきしんいちは、だまってバッグのなかからかさを取りだした。

ふたりは、境内けいだいのまえのだから坂さかを歩きはじめた。

坂は百メートルたらずで、上下四車線の大通り西武街道せいぶかいどうへ出た。

香代はもういちど、境内のほうをふりかえった。

一郎いちろうのすがたは見えなかったが、見おぼえのある黄色と黒のだんだらもようの、うしろに女の子を乗せたバイクが走ってきた。

バイクは、香代と信一を走りすぎたところで急停車した。

バイクを運転していた赤いヘルメットが、ウィンドシールドをはねあげてふりむいた。

「あっ、さぶちゃん」

香代が手をあげてさげんだ。

「香代ちゃん、栄光塾へいってるんだって？」

さぶちゃんが、すごみのあるかっこうににあわず、やさしい顔でいった。

「うん、今週からね！」

「じゃ、一高はバッチリだな」

さぶちゃんは、左手の親指のつめをかみながらいった。

「そんなこと、わかんないわ」

香代が笑顔でいうと、相乗りの少女が、さぶちゃんの背をトンと、たたいた。

「さぶ！ でれでれして、みっともないよ！ あんなの、関係ねえだろう！」

赤く染め、ちりちりのパーマの髪の少女は、こういって、ちらっと香代をにらんだ。

「じゃ、しっかり勉強しろよな！」

さぶちゃんはこういって、大きくエンジンをふかして走りだすと、たちまち車の列にまぎれこんで見えなくなった。

「へえー、おどろいたな」

ふたたび歩きだしたところで、信一が香代にいった。

「なにが？」

香代は、大きな目をばちっとひらいて信一に反問した。

「なにが……ってさ、きみがあんな暴走族ぼうそうぞくを知ってるなんて」

「だって、子どものころ、よく遊んでもらったのよ。やさしくしてもらったのよ。わたし、ひとりっ子だったから、おにいちちゃん、おにいちちゃんって、いつもくっついていたのよ」

「意外だな——」

信一しんいちは、まだ暴走族のさぶちゃんと、香代かよがむずびつかないらしかった。

「あのころは、とても楽しかったみたい」

香代がつぶやいた。

「あのころって……」

「幼稚園……いや、小学生になってたかな……西くんもいっしょだったのよ」

「ふーん……」

信一は、香代と地域ちいきがちがう。中学校ではじめて香代といっしょになった。信一は、自分に關係のないことなのでちょっとおもしろくなかった。

信一が香代とおなじクラスになったのは、二年のときだ。しかし、親しく口をきくようになったのは、つい一週間前、クラスがおなじ三年B組で、座席がとなりどうしになってからのことだ。栄光塾えいこうじゅくへいかないか、とさそったのは、信一のほうだった。香代はすぐに返事をしなかった。

大木信一おおきしんいちの名を、たいていの三年生は知っている。二年のときから、模擬テストでいつも学年トップで、それが廊下ろうかに掲示けいじされていたからだ。

有坂香代の名も広く知られている。百六十センチのすらりとしたからだつきで、いかにも中学
生らしい清らかな感じをあたえた。切れ長な目が、聡明さをたたえていて、はたから、冗談口
をかけられない、かたさを感じさせたが、わらうと、その目がかすかにいたずらっぽい輝きを見
せて、まわりをとつぜんなごませるのだ。

美人で成績もいい。やはり二年の模擬テストでは、学年八位で掲示されたことがあるから、
いっそうその名は知られている。

香代は、今まで塾と名のつくものにかよったことがない。それが家庭の方針だからだ。もっと
も、「塾へいくな」ということではなく、「自分で判断して決めろ」ということなのである。

中三になったら、とたんに香代のまわりがそうぞうしくなってきた。新聞の折り込み広告で、
塾の名や、家庭教師の協会のようなものがあることを知った。どこで調べてきたのか、中三のい
る家のポストには、近くの塾の案内広告が投げこまれていた。

「わたし——○○塾へいこうかしら」

「やっぱり、いっておいたほうがいいかもね」

「わたしは、もう手いっぱいよ、日曜日しかあいてないわ」

香代のまわりでこんな会話がかわされ、また、バレエ部の仲間から塾に関する相談の電話がか
かってきたりする。

信一にさそわれて、すぐに返事をしなかった香代は、その夜西一郎に電話で相談した。

「ね、大木くんみたいな秀才が塾にいくっていうんで、びっくりしちゃった。きびしいんだな
と思ったわ」

「なにも、きびしくなんかないだろ、香代……いや、有坂さんは学年成績がいいんだもん……き
びしいのはおれのほうさ」

幼稚園のころは、まだどちらも団地に住んでいて、団地のフロアがおなじであったから香代
は一郎を、「二ちゃん」と呼び、一郎は香代を、「香代ちゃん」と呼んでいた。でも中学では、二
年ではじめてクラスがいっしょになった。

「いっしょに栄光塾へいかない？」

「あすこは成績の悪いやつはいれないっていうぜ」

「二年のときの通信簿を持っていくんだって」

「じゃ、おれなんてだめさ」

「そんなことないよ。西くんなら……」

と、いいかけると、電話の向こうで、一郎のいくぶんやけぎみの笑い声がした。

「うれしいことをいってくれるね……でも、昔のおれとちがうんだぜ……」

「どうちがうの？」

「そういわれるとこまるけど……」

「とにかく、ようすを見にいかない。そのうえで、はいるはらないを決めたらいいわ」

栄光塾は、この十日間、無料進学相談室をひらいている。それが、ときには、「きみにはこの塾はむかない」といわれることにもなる。相談とはいうけれど、選抜の選考試験でもあった。

香代にしきりにすすめられて、一郎は、ふとその気になった。

(……そろそろ、このへんで自分をなんとかしなければ)

と黙っていたやさきでもあった。

「……そうだな、じゃ、とにかくいってみたいだろうか」

「わーっ、よかった。いっしょにがんばろうね……六年のときみたいに……」

といって、香代は電話を切った。

「六年のときみたいに……」ということだが、一郎の胸にのこった。でも、わずか三年たらずまえのことなのに、一郎には、なぜか遠い日のできごとのような気がした。

「あのころはよかった」

一郎は、ひとりでつぶやいた。

五分後、香代から電話で、大木信一と三人でいこう、四時に永福寺の山門のまえで待ちあわせよう、といってきた。

一郎は、香代のことばをにがい思いでできた。さびしきとも、嫉妬ともつかない思いも、胸をよぎった。

秀才で、いっけん高校生のようにおちついて見える大木信一は、悔やしいけれど香代とにあ